石田頼房先生から手渡されたもの、次世代へ手渡すもの

石田頼房先生の計画地区の今を歩く

吉祥寺・立川・八郎潟・小国

2016年10月29日

ＴＭＵ都市と住宅を考える会　　大竹　亮

《都市農村計画》
実現した計画で、計画に深く関与したもののみをあげる。

5　立川南口駅前区画整理事業（1972-75）

4　常滑市矢田地区農村基盤総合整備パイロット事業基本計画（1972-73）

3　山形県小国町滝集落移転計画（1968-70）

2　八郎潟干拓地新農村建設計画（1961-77）

1　吉祥寺駅北口駅前広場計画（1959-62）

石田頼房全著作リスト（自編）より

都市計画　≠　塗紙計画

吉祥寺北口　2016/0423

八郎潟干拓地　2016/0715

立川南口　2016/0515

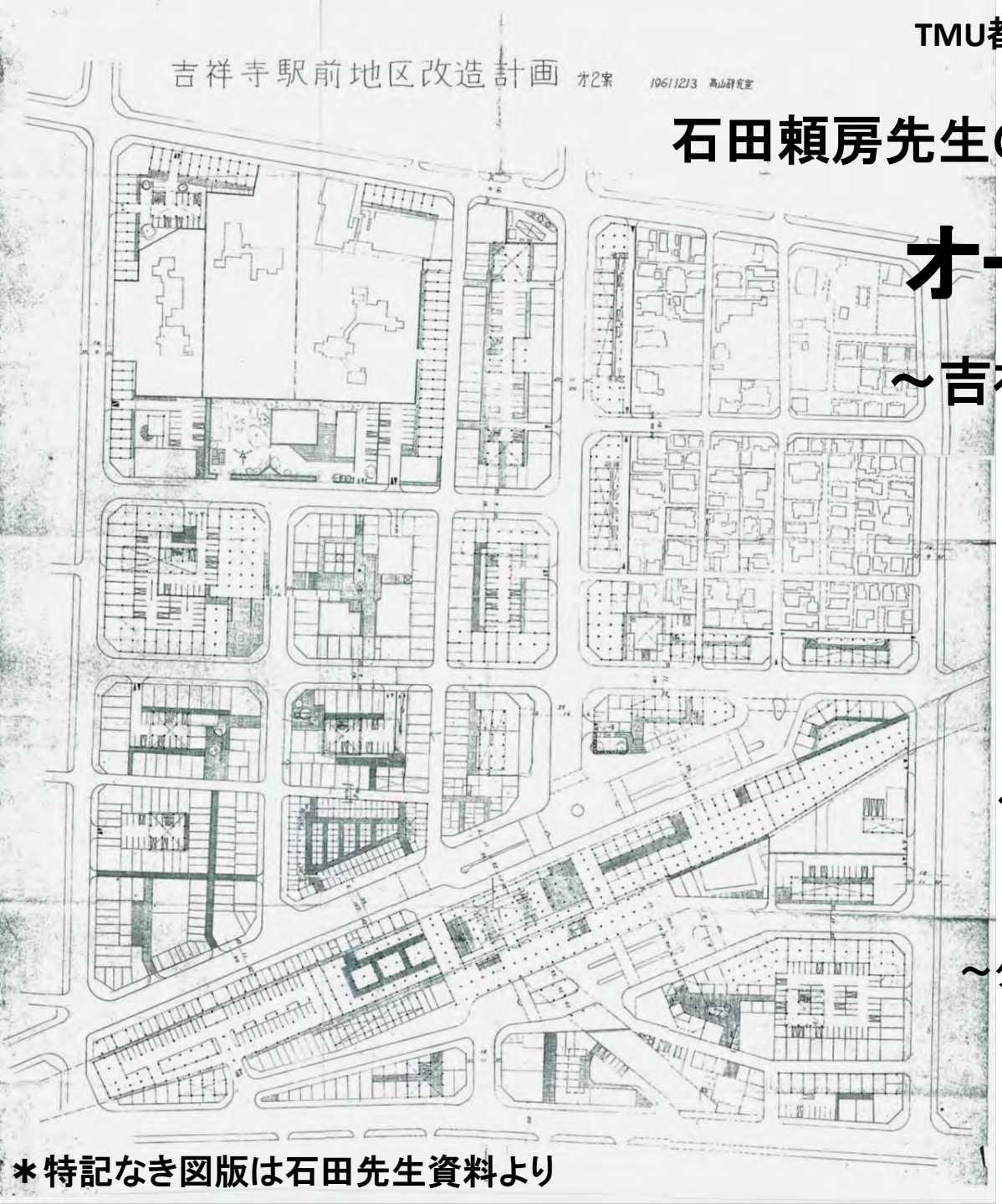
小国幸町団地　2016/0716

TMU都市と住宅を考える会　第145回研究会

石田頼房先生の計画地区を歩く（その1）

オーバーレイする街

～吉祥寺駅周辺の都市改造～



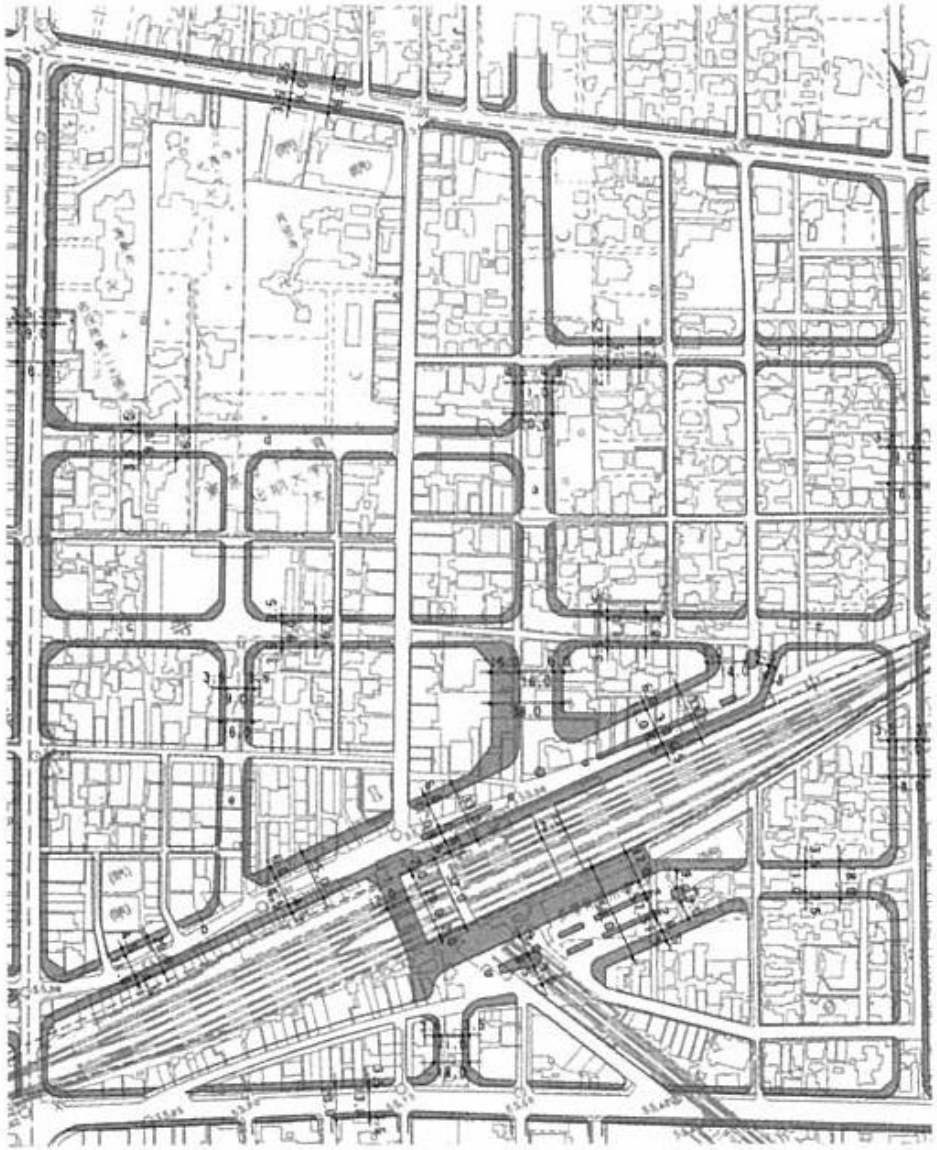
2016年4月23日（日）14：00～17：00

吉祥寺駅北口広場～サンロード商店街
～月窓寺～五日市街道～吉祥寺大通り
～旧近鉄裏界隈（図書館・駐輪場）
～ペニーレーン～F＆Fビル＋元町通り
～ハモニカ横丁（マーケット）
～ダイヤ街ローズナード＋レンガ館モール
～東急裏住宅地～大正通り＋中道通り
～井之頭公園～吉祥寺駅南口

参加者：25名

＊特記なき図版は石田先生資料より

高山案(1962年)



高山案(昭和37年)

※武蔵野市パンフレットより

※武蔵野市が東京大学高山研究室に委託
(担当　石田頼房＋伊藤滋)

＜計画の特色＞

・細長い駅前広場(街と分断しない)
・車は一方通行とし、最小の道路幅
・商店街とは別の並行バス通り
・T字路を基本とし通過交通を排除

・街路にかかる商店が多数
・各街区も共同建替えを想定
　(スーパーブロック方式)

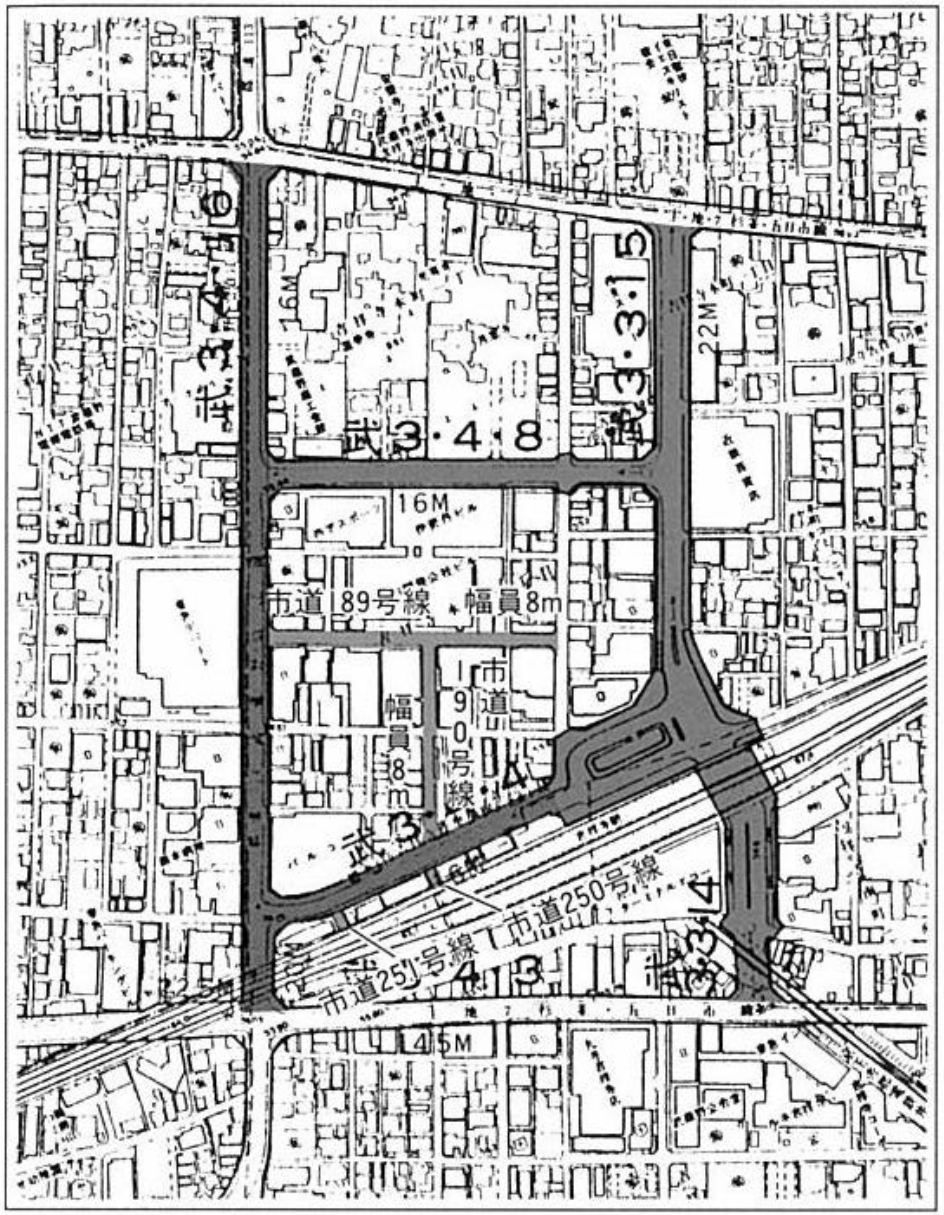
↓

市が地元に説明したところ、
移転商店への対策(代替地、補償)
が不明確のため、全面反対される

↓

事実上、白紙撤回となる

実施案(1964年)



中央線高架複々線事業に伴い、
東京都が道路計画案を作成し、
武蔵野市に対し実現を強く要請

↓

＜計画の特色＞

- 基本的な骨格は高山案を踏襲
- 新設道路を大幅に減らす
  （幹線街路2本、区画街路1本）
- 駅前広場は長方形に

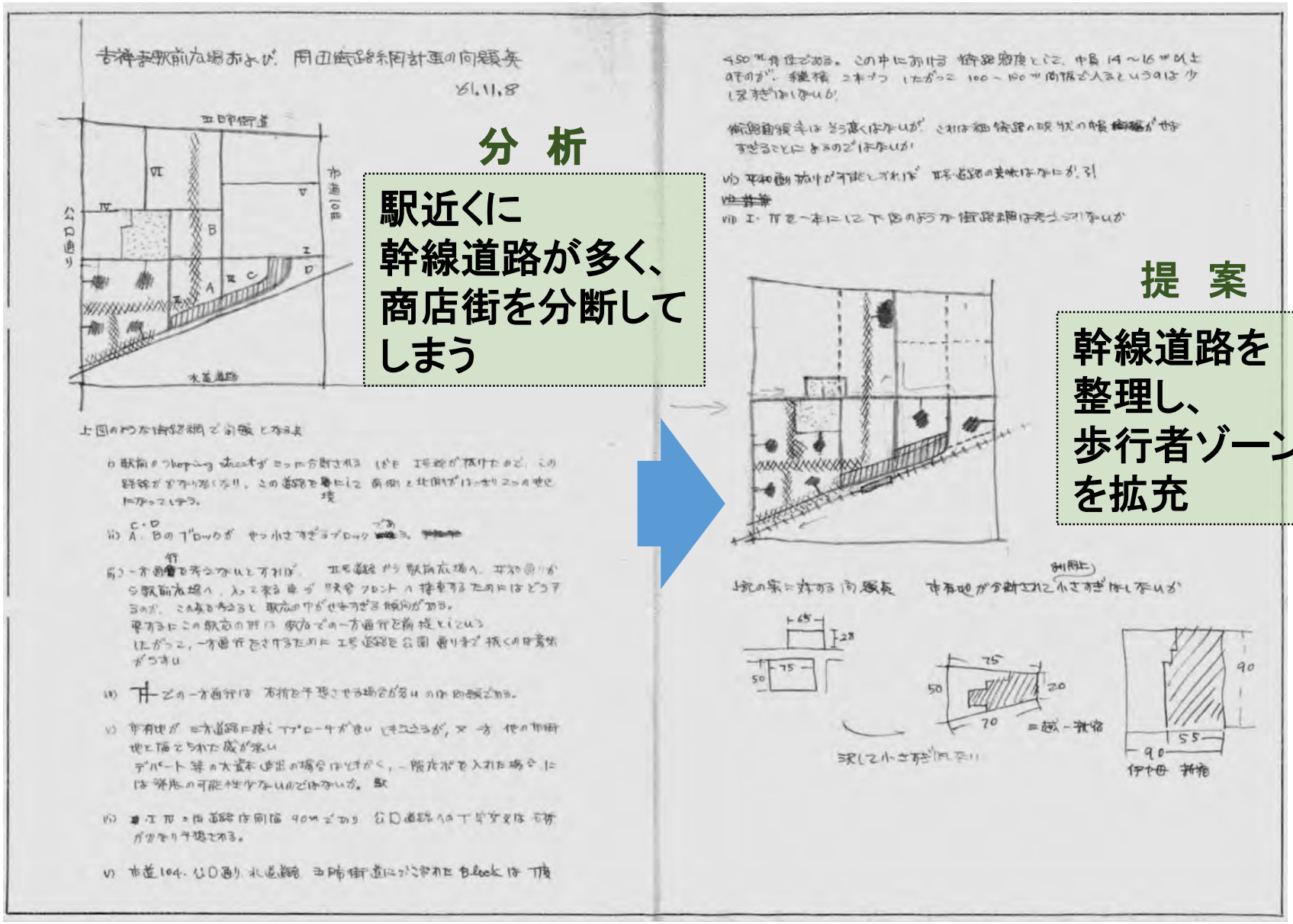
- 街路にかかる商店が大幅減少
- 各街区の共同建替えは見送り

↓

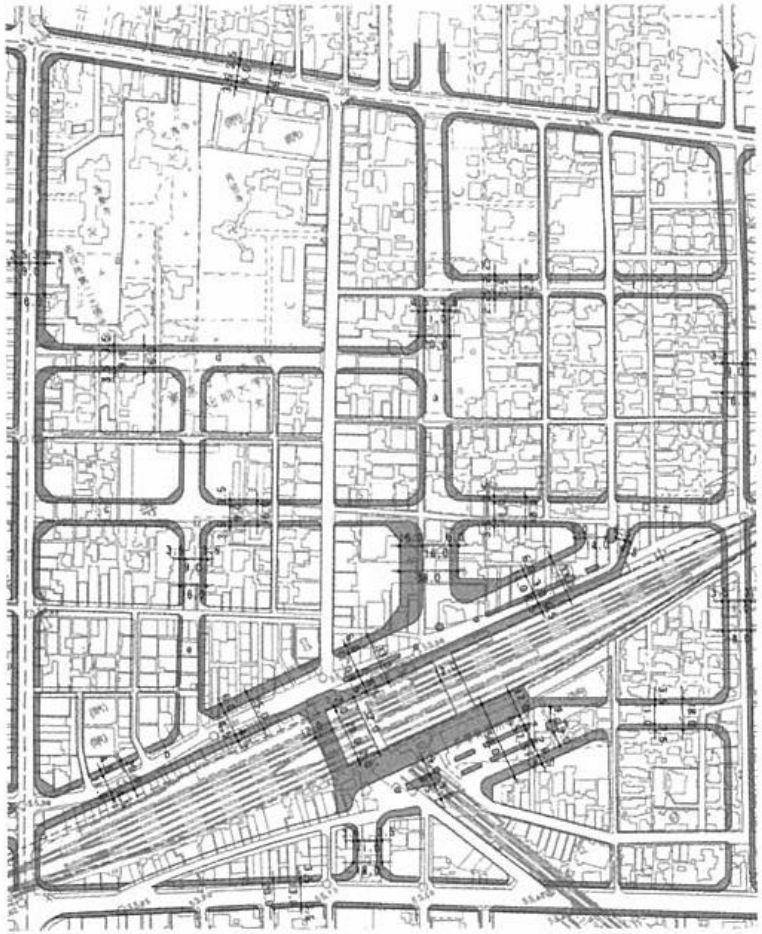
地元の同意が得られ、
道路事業として実施へ

※武蔵野市パンフレットより

石田メモ　吉祥寺駅前広場および、周辺街路網計画の問題点（1961.11.8）

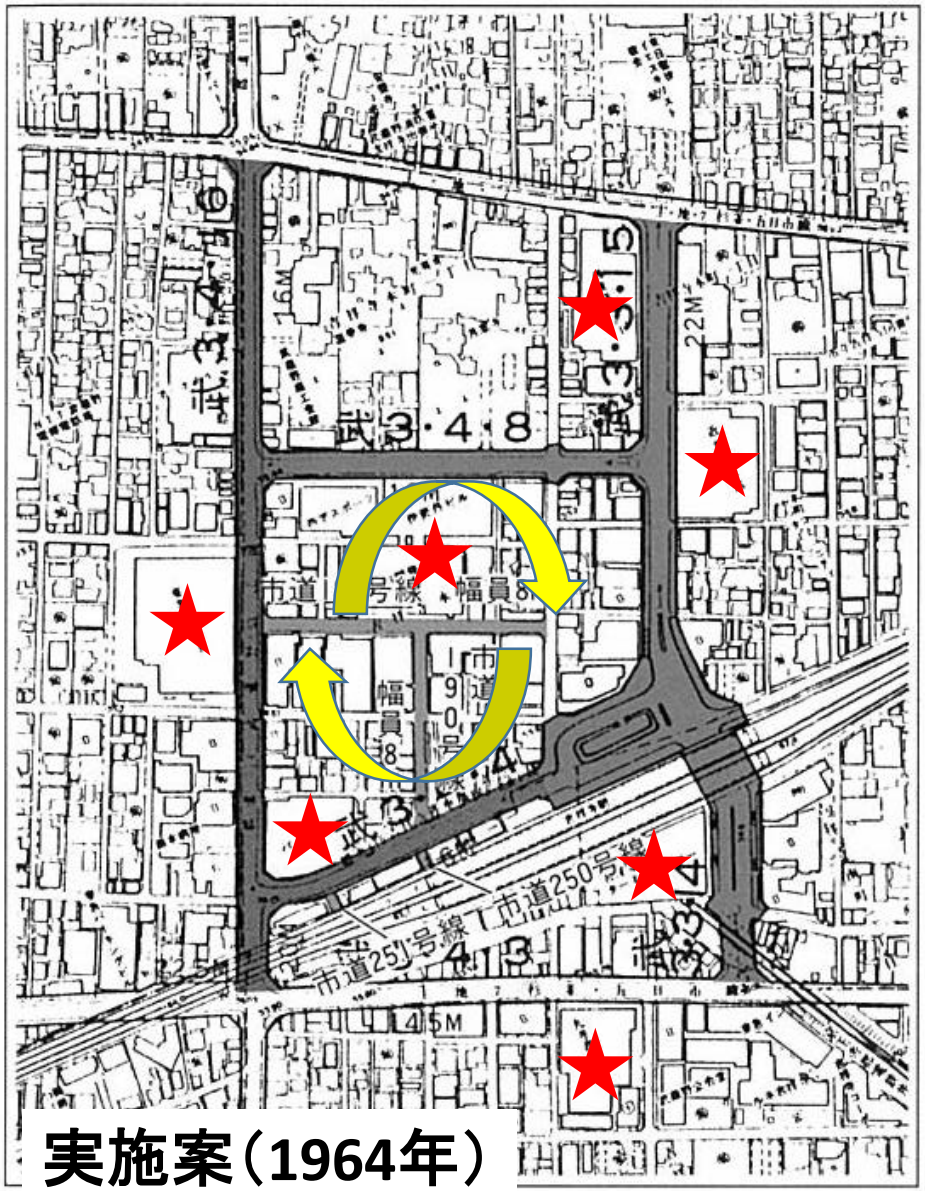


計画が変わったことの効果



高山案（1962年）

★ 大型店立地



実施案（1964年）

吉祥寺北口の計画を歩く

- 駅前広場や道路で街と駅が分断されていない。
（バスは一方通行で通り抜けるため、大きな広場や広幅員道路は不要）
- 幹線道路は商店街を拡幅せずに、並行して設けられ、商店街の賑わいを保つ。

サンロード商店街

コンパクトな北口広場と
ムーバス

- 幹線道路で囲まれたエリアは、歩行者専用ゾーンで、アーケード商店街や路地がきめ細かくネットワーク。（建物1階の通り抜けも活用）
- 大型店舗（再開発ビル）は、駅から少し離れており、大勢の人々がその間の商店街を回遊。「吉祥寺方式」

東急百貨店（左奥）とF＆Fビル（右）

建物内を通り抜けて
続くペニーレーン

- ヒューマンスケールの路地や通り抜け空間が迷路状に多数あり、戦後マーケットも残る。
- 昔ながらの老舗や、ひと味ちがうこだわりのショップが頑張る街。

（しかし近年は全国チェーンの店舗が目立つ･･･）

戦後の面影残るハモニカ横丁

専門書に強い古書店も
近年ついに閉店

吉祥寺の街の魅力

・商店街と住宅地、大型店とショップ、専門店と日用品店、老舗とトレンドなど、都市機能の多様性・複合性。

・歩行者主体で回遊性のあるヒューマンスケールな空間と、意外な変化に満ちた迷路的な面白さ。

→ ラビリンス（迷宮）の街のような魅力

・多種多彩な人々の要求に対応する各種の機能が、同一空間に混在。
（＝外来者と生活者、老若男女がともに楽しむ街）

・それを破綻なく支えるきめ細かい歩行者空間ネットワーク。

→ 「ラビリンス（迷宮）の街」ではなく、
「オーバーレイ（重層）する街」
（1998年に一緒に歩いた時の先生のコメント）

吉祥寺のまちづくり

●計画者が街を熟知し（十分に読み解き）、街の持ち味を損なわず魅力を増すような計画を創り（しっかり描き）、それが実現。

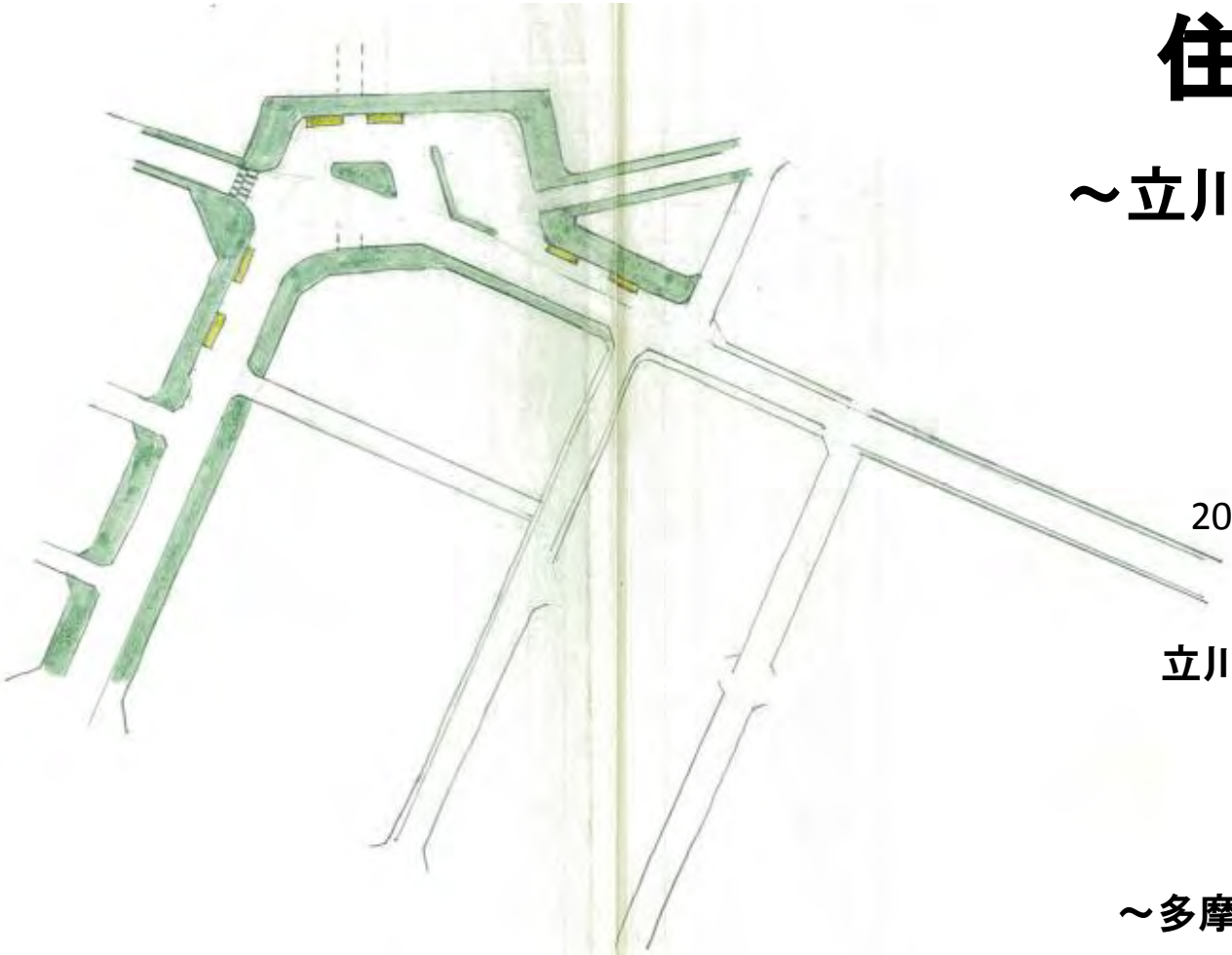
●一見、自然発生的な街のようだが、実は周到に計画された街。（計画者は、徹底的に街を読み解くことが必要）

●高山案は、最低限の整備しかできなかったが、結果的に整備できなかった部分も含めて魅力的な街が実現している。

石田頼房先生の計画地区を歩く（その2）

住民納得案の今

～立川駅南口の都市改造～



2016年5月15日（日）13：00～16：00

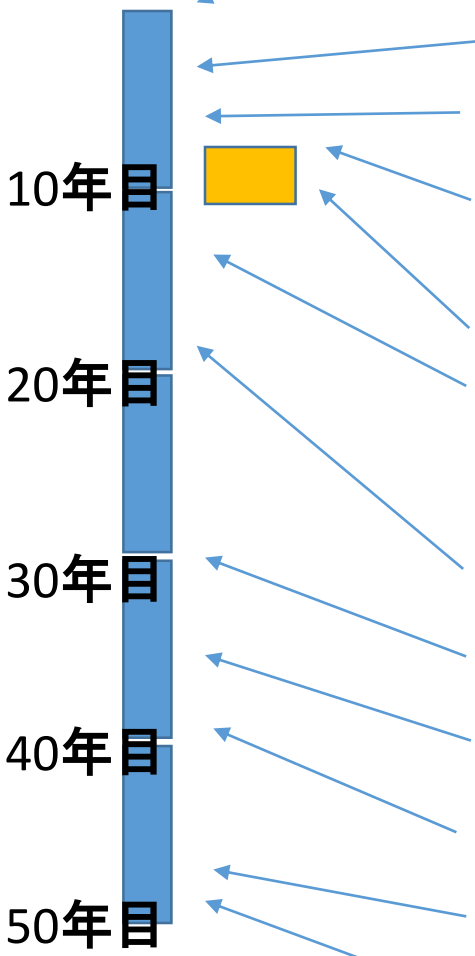
立川駅南口～グランデュオ＋サザン
～ウインズ立川～錦第二公園
～立川まんがぱーく（旧市役所）
～多摩モノレール立川南駅
～柴崎町～北口～ファーレ立川
～多摩モノレール立川北～立川駅北口

参加者：26名

＊特記なき図版は石田先生資料より
＜駅前広場・バス停のスケッチ＞

東京都立大学都市計画研究室

事業の流れと先生の関わり



1964(s39)北口との格差是正、駅前広場整備などを目的に、区画整理事業が都市計画決定

・・・権利者(住民)の同意が得られず8年間停滞

1971(s46)革新系の阿部市長(元都立大人文学部教授)誕生

1972(s47)都市改造計画調査委員会が組織され、石田先生が委員に(計画への関わりは1975まで)

1974(s49)調査委員会の答申書

1976(s51)促進委員会の答申書

・・・住民納得案がまとまる

1982(s57)橋上駅完成、自由通路は地下から橋上へ

1994(h6)北口基地跡地再開発ファーレ立川完成

1999(h11)南口再開発ビル・グランデュオ完成

2000(h12)南口にもモノレール開通(北側は1998)

2010(h22)市役所が北口に移転

2013(h25)土地区画整理事業完了

住民納得案の要点

従前計画の課題

・減歩率が高い

・既存を無視した道路計画

・現住地を考慮しない換地

・駅前広場計画地の
　零細権利者の生活再建

納得案の提案

・道路、駅前広場を縮小し、
　減歩率を低く抑える

・既存を尊重した道路計画
　動線計画の見直し

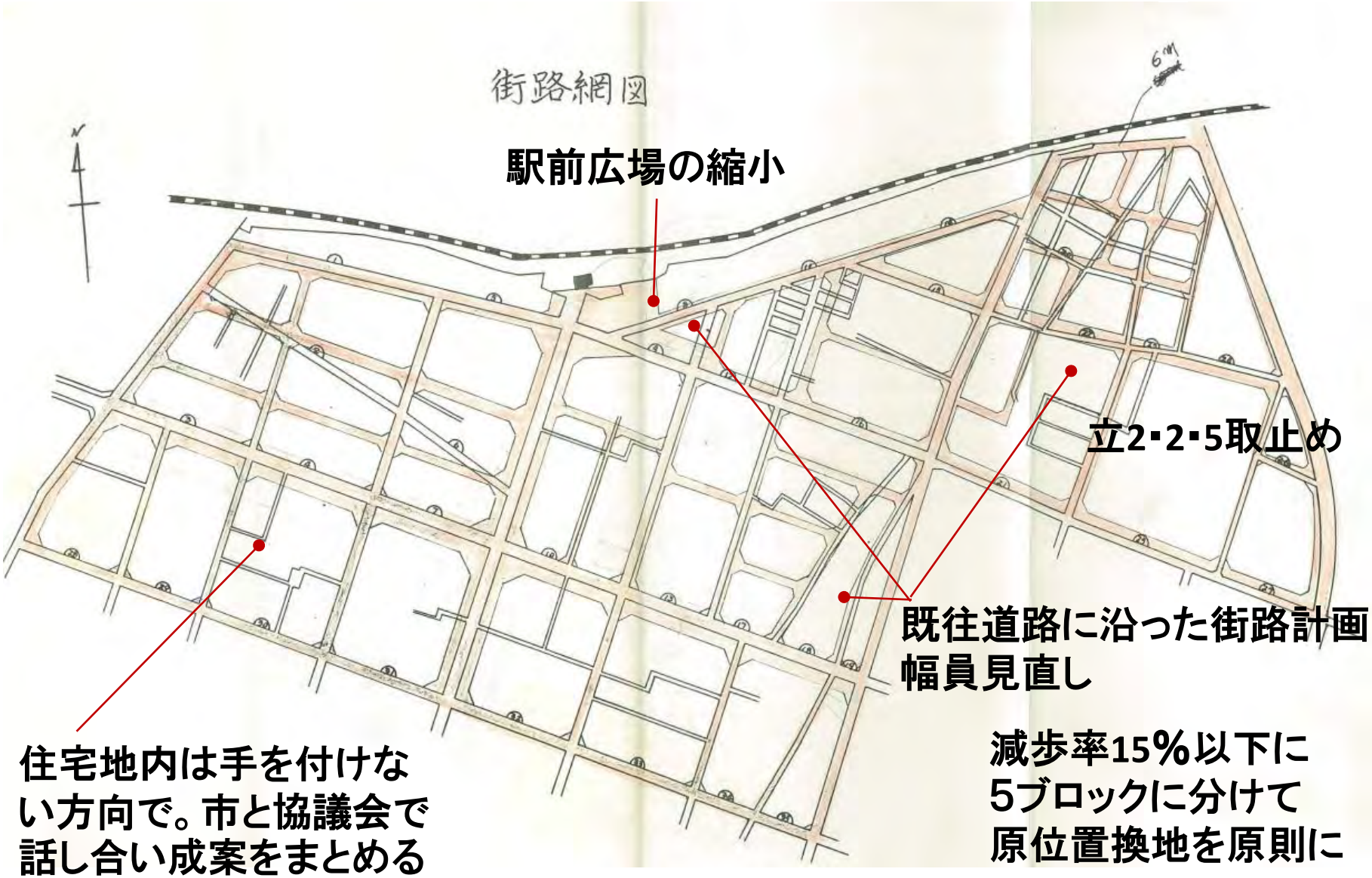
・ブロック内での換地
　街区内は手を付けない

・今後の課題として位置づけ、
　事業は進める
→共同ビル化、まちづくり公社
　設立など、継続検討とする

従前の計画

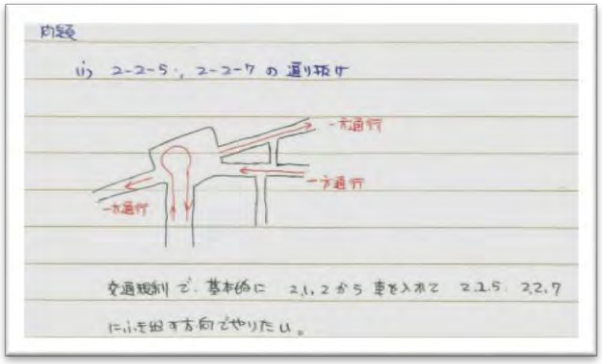
＊計画街路着色など加筆

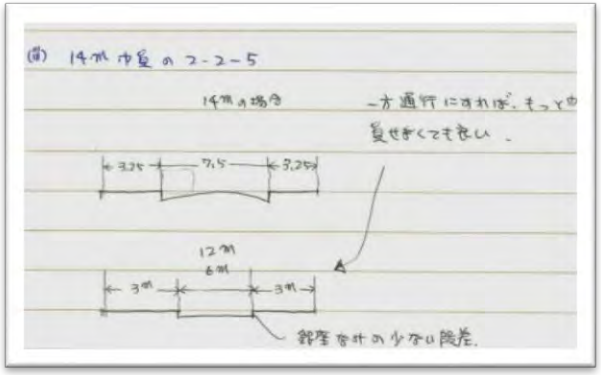
変更計画案


街路網図
駅前広場の縮小
立2・2・5取止め
既往道路に沿った街路計画幅員見直し
住宅地内は手を付けない方向で。市と協議会で話し合い成案をまとめる
減歩率15％以下に5ブロックに分けて原位置換地を原則に

＊主な変更点

石田スケッチ





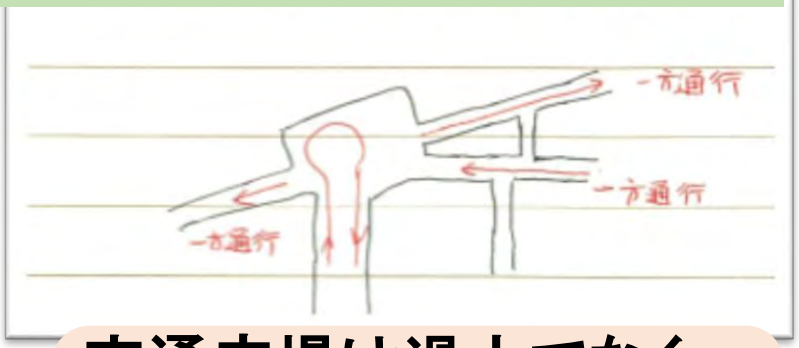
石田ノート

立川南口の計画を歩く

駅前再開発ビル

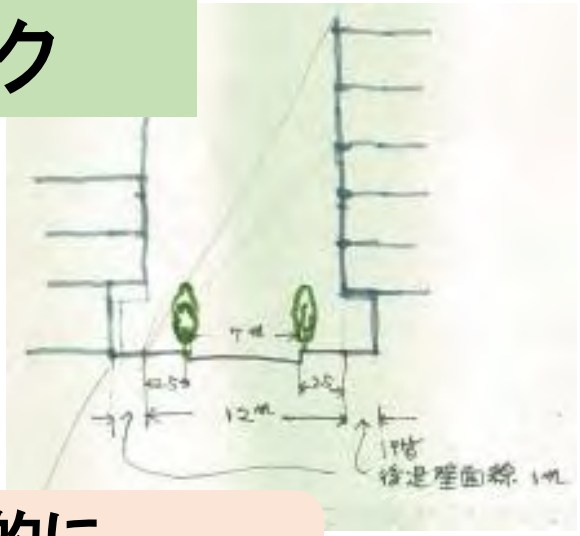
デッキ下の地権者床は路地的空間（小規模だが路面店を作りたい意図が実現）
駅近道のアピールは苦心の作

駅前広場の縮小



交通広場は過大でなく、バス等の流れも処理されている

1階のセットバック



任意ながら統一的に
セットバックした意識の高さ

既存街路を生かす

区画整理でありながら
界隈性が残されている

立川南口の都市形成

・従来の街の姿を継承した身の丈開発で、
北口とは違った魅力、猥雑性、界隈性がある。

・住民の合意形成で事業は進んだが、思い切った改造
ではなく、街の大きな発展には至っていない。

北口：モノレール下の大規模緑道

南口：
駅近くの歩車共存道路

立川南口のまちづくり

・従来の都市構造を否定せずに、問題解決ができる「都市改造」の方法を示した。
・住民運動が「絶対反対」から脱却していく一つの道筋をつけ、計画実現が大きく進んだ。

・長い時間の経過や、商店街のあり方、車の使い方、周辺環境・計画などが大きく変わったことにより、計画理念の実現は道半ばとなった。

「8年間のデッドロック → 住民納得案をつくりなおした。地域住民・諸官庁・審議会とのネゴシエーション、生々しい。時間はかかるし、研究者のやるべきことでもないかもしれないが、面白い」 （1978年の受講ノートより）

TMU都市と住宅を考える会　第21回国内現地研究会

石田頼房先生の計画地区を歩く（その2）

秋田八郎潟干拓地

新しい農村中心地計画

2016年7月14日（金）

八郎潟駅～緯度経度交会点～干拓博物館～道の駅おおがた～入植者住宅地～公民館～情報発信者入村地～墓地公園～中心商店街～サンルーラル大潟

講師：木村儀一先生

参加者：18名

研究室での八郎潟担当として、英華は石田頼房をあてた。二年前に修士課程を終え、博士に取り組んでいる生まじめな青年である。設計もうまいが、宮沢賢治などの小説も好きらしいから、東北で遠くても嫌がらずにやるだろう。

あまり仕事のなかった数年前とは対照的に、いろいろなことを依頼されるので、高山研究室は忙しい。そのなかで農地というと、建築の学生はあまりやりたがらないが、石田は意義のある仕事には労を厭わない性分だ。

「これはコルホーズだぞ」

と、言ってハッパをかけたのは、石田がマルキストだったからである。カリフォルニアを出したら断りかねないが、コルホーズといったら、やる気を出すに違いない。

石田はのちに東京都立大学教授として都市計画の権威となるが、師の英華を尊敬しつづけ、かつマルキストとして生きることになる。

――君はいつもぼくの左側に座っているな。

時折、師は弟子にそう茶目っ気まじりに言ったが、自らもマルクスをかじったことのある英華の、それは愛情表現であったろう。

英華は東大建築学科の後輩である浦良一にも協力を頼み、八郎潟に取り組んだ。

ここは干拓地の中央西より、砂地盤のところにセンター地区を設けた。面積六百九十ヘクタールの居住区と農業施設区がある。

居住区は、おおむね長辺二キロメートル、短辺一キロメートルの約二百ヘクタールの用地で、幅[illegible]トルから六十メートルの防風林によって囲まれている。中央に役場、公民館、農協、商店、診療所、学校、運動公園、墓地などからなる三十五ヘクタールの公共施設ゾーンがあり、その東西

出典：東秀紀著「東京の都市計画家　高山英華」（2010年）

大潟村案内図

八郎潟新農村計画策定

都市計画学会集落計画委員会
（高山、浦、石田、木村ほか）

大潟村中心地
（村内で最も地盤が良い地区に都市機能を集中配置）

計画理念＝生活の質の向上

- 生産と生活の分離
- 都市的利便性の提供
- 景観や住環境の享受

→ 市街地を1カ所に集約
営農地まで車で通勤
（平均14km）

奥羽本線
八郎潟駅

八郎潟新農村計画・中心地計画図

出典：SD No.22(1966.10)石田頼房「中心地計画」

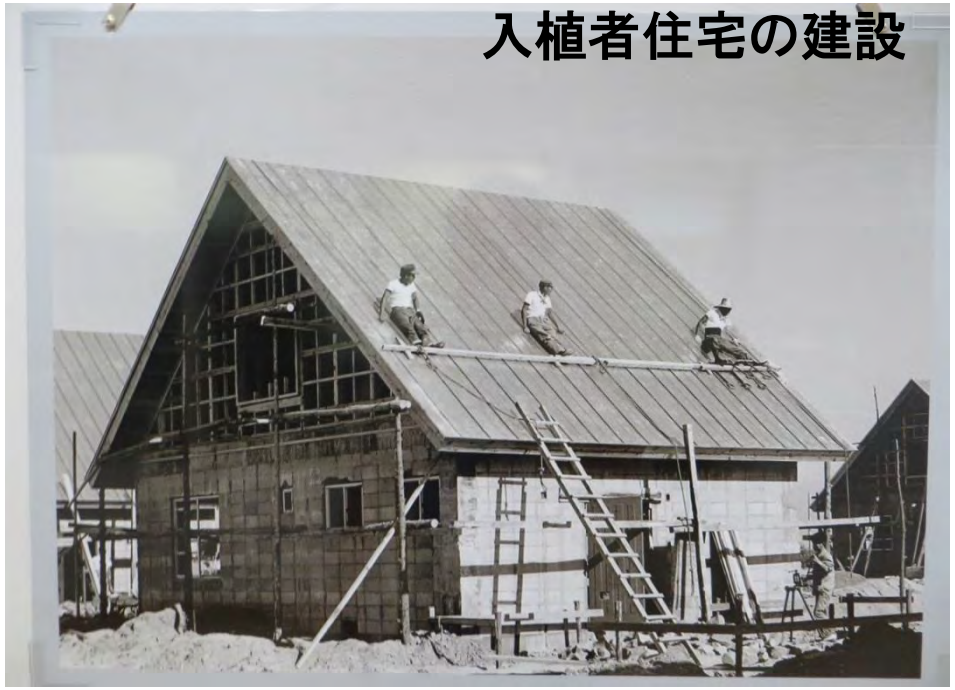
- 中央軸の歩行者道に沿って公共施設
- その両側に、クルドサック型住宅地
- 周囲には産業用地、将来拡張ゾーン

見渡す限りの圃場

総合中心地の外周緑地帯

歩行者緑道に沿った診療所

後に駐車場が
設けられた商業地


入植者住宅の建設

現在も残る当時の住宅

幹線道路に沿った緑地帯

大都市郊外のような住宅地

拡張予定地に整備されたホテル

小中学校の建替え（一体建築に）

干拓博物館と観光市場

芸術家のアトリエもある新しい住宅地

八郎潟農村整備計画の特色

■合理的な空間構成による生活の質の向上

・大規模経営農地＋コンパクトな総合中心地

・市街地・居住地を1カ所に集約し、都市機能・施設を充実

・耕作地に車で通勤という営農スタイル

■近代的な居住スタイルの実現

・伝統的農村風景と異なる郊外ニュータウン

・区画500m2、増築を想定した住居計画等

■高水準の都市機能・デザイン

・美しい景観：樹林・街路沿いの花畑・生垣

・歩行者ネットワーク：クルドサック・緑地帯・緑道・開放型施設

・質の高い公共施設：学校・幼稚園・博物館・ホテル・公民館等

＊ニューアーバニズムを連想させる稀有なプロジェクト

＊エリアマネジメント主体：開発地＝自治体（特例法で新村）

八郎潟干拓地のまちづくり

●一貫したコンパクトシティによる地域の持続性

→ 村内の市街地・居住地は、総合中心地1カ所のみ

→ 将来拡張予定地の活用（ホテル、博物館、新住宅地等）

●高い農業生産性とすぐれた生活環境を実現

→ 1戸当たり農地17ha、粗収益3300万円

→ 県内で最も人口減少が少なく、平均年齢が若い（将来予測）

→ 若年層には、都市的な生活環境も魅力（後継者に困らない）

●住宅建替、商業再編等による集落景観の変化

→ 土地利用ルールの必要性

（石田先生が研究会で再三強調するも実現せず）

「八郎潟中心地とかけて、別れた妻と解く」

（1981年再訪後、先生の言葉）

TMU都市と住宅を考える会
第21回国内現地研究会

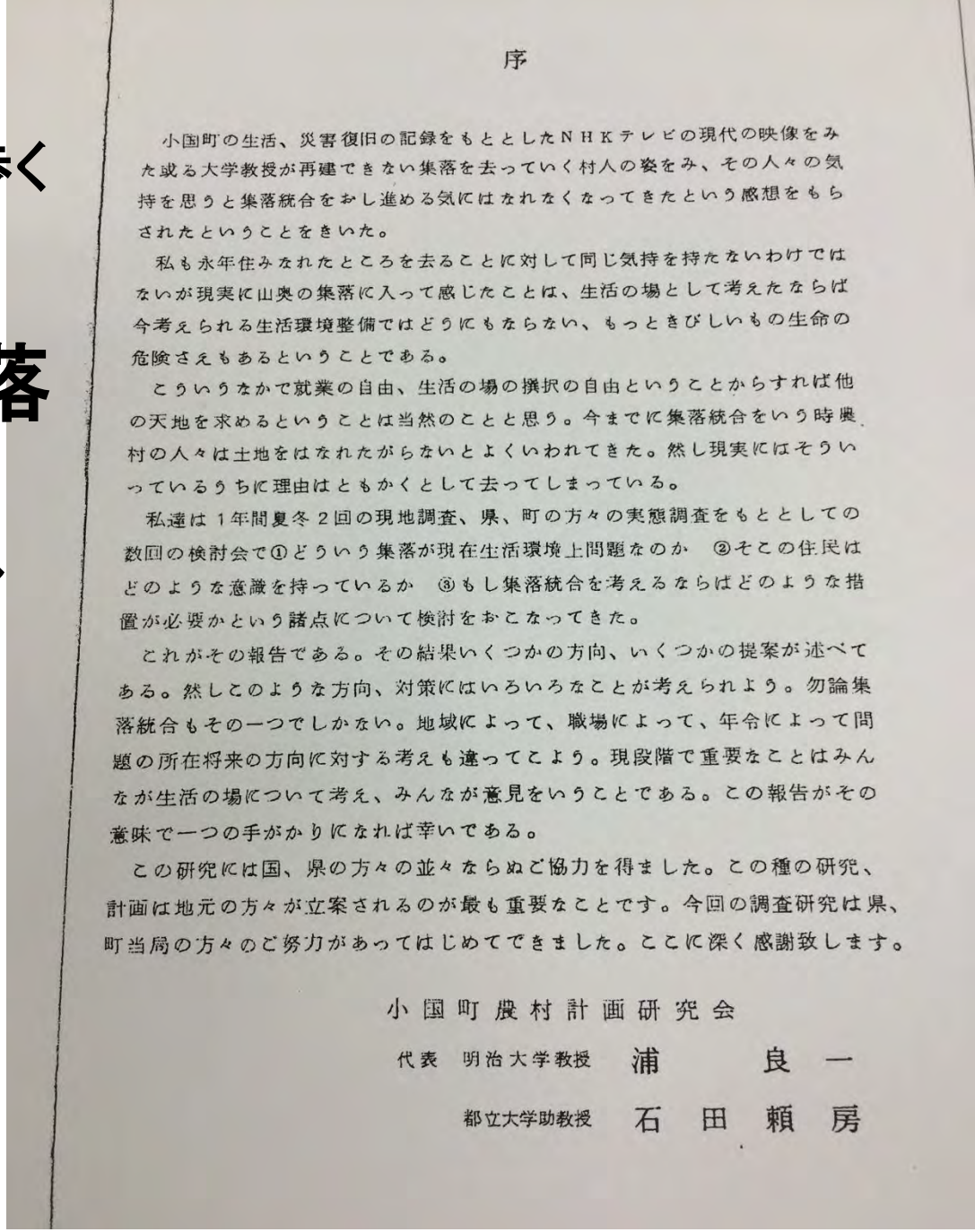
石田頼房先生の計画地区を歩く（その4）

山形小国町山村集落
～山間地集落を中心部に集団移転～

2016年7月15日（土）

羽越本線坂町駅～道の駅白い森おぐに～朴の木峠ぶな林～幸町団地（滝集落移転先）～小国小学校～上叶水集落～横川ダム～山形新幹線赤湯駅

講師：木村儀一先生
参加者：18名



序

小国町の生活、災害復旧の記録をもととしたＮＨＫテレビの現代の映像をみた或る大学教授が再建できない集落を去っていく村人の姿をみ、その人々の気持を思うと集落統合をおし進める気にはなれなくなってきたという感想をもらされたということをきいた。

私も永年住みなれたところを去ることに対して同じ気持を持たないわけではないが現実に山奥の集落に入って感じたことは、生活の場として考えたならば今考えられる生活環境整備ではどうにもならない、もっときびしいもの生命の危険さえもあるということである。

こういうなかで就業の自由、生活の場の撰択の自由ということからすれば他の天地を求めるということは当然のことと思う。今までに集落統合をいう時興村の人々は土地をはなれたがらないとよくいわれてきた。然し現実にはそういっているうちに理由はともかくとして去ってしまっている。

私達は１年間夏冬２回の現地調査、県、町の方々の実態調査をもととしての数回の検討会で①どういう集落が現在生活環境上問題なのか　②そこの住民はどのような意識を持っているか　③もし集落統合を考えるならばどのような措置が必要かという諸点について検討をおこなってきた。

これがその報告である。その結果いくつかの方向、いくつかの提案が述べてある。然しこのような方向、対策にはいろいろなことが考えられよう。勿論集落統合もその一つでしかない。地域によって、職場によって、年令によって問題の所在将来の方向に対する考えも違ってこよう。現段階で重要なことはみんなが生活の場について考え、みんなが意見をいうことである。この報告がその意味で一つの手がかりになれば幸いである。

この研究には国、県の方々の並々ならぬご協力を得ました。この種の研究、計画は地元の方々が立案されるのが最も重要なことです。今回の調査研究は県、町当局の方々のご努力があってはじめてできました。ここに深く感謝致します。

小国町農村計画研究会
代表　明治大学教授　浦　良一
都立大学助教授　石田頼房

山形県小国町の開発構想に関する報告書（案）1969年3月

小国町生活圏構想の策定
→ 集落移転事業の実施

中心地(駅、役場、小中学校等へ徒歩圏)に幸町団地を造成

小国町農村計画研究会の提言

（浦良一、石田頼房、木村儀一ほか）

- 全117集落を実態調査
- 居住限界集落(25集落)を明らかに
- 生活圏再編でナショナルミニマムを確保

「生活圏整備構想」

①中心地(1カ所)
②拠点集落(3カ所)
③背後集落(5カ所)
④移転候補(25カ所)
⑤中心部と集落間の道路整備

滝集落37戸を中心地へ集団移転、夏山冬里宿舎を整備

町面積は23区より広いが95%は山林

小国町生活圏構想図

附　集落別人口（戸数）減少率（昭和35～45年）

注 1.　小国町役場『集落再編整備基本計画』および『'74 おぐに』により作成.
2.　単位%.

要移転集落に対し町が
夏山冬里居住構想を説明
↓
滝集落では住民の大半が
移住を希望
↓
集落再編成モデル事業

して整備すること，第4に既存の生活関連施設までの時間距離が10分以内であることに留意している。

分譲住宅

豪雪地帯におけるモデル住宅として高床式を採用。

規模，構造，仕様等の決定にあたっては創造の空間をのこし，自己資金の負担限度を 100 万円程度として設計。

現に，Aタイプの屋根裏ならびにピロッティは，めいめいが居室，車庫，作業場，倉庫などに活用している。

新をつらねる分譲住宅

Aタイプの住宅

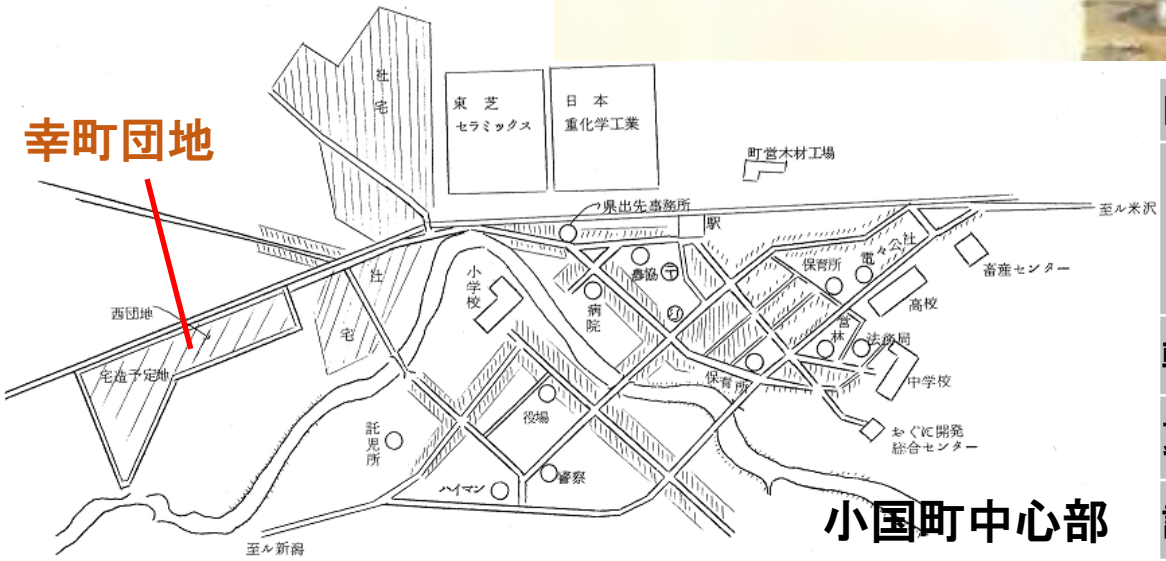
Bタイプの住宅

Cタイプの住宅

※小国町の事業パンフレットより

■宅地造成計画

面積	69,058 ㎡
区画	210 宅地
公営住宅地	56 戸
一般分譲地	80 戸
移転者住宅地	74 戸
（公営	39 戸）
（分譲	35 戸）
平均区画面積	251 ㎡
事業費	7827.8 万円
事業年度	1969-70 年度



■移転先と生活設計

移転先	町内		県内	県外	総数
	幸町団地	その他			
転職	7	1	6	13	27
夏山冬里	5		5		10
計	12	2	11	13	37

小国町を象徴する白い森
（ブナ林）

中心地の幸町団地

積雪に配慮した住宅計画

小国小学校（2014年）

9つの小学校を1校に統合
スクールバスで送迎
中学校と一体化

小国包括ケア施設（1999年）

叶水基幹集落センター
（1974年）

叶水集落（拠点集落）

店舗、農協、保育園が閉鎖
生活拠点の持続可能性に疑問

小国町集団移転事業について

人口減少地域での生活圏域構成を手段にした生活環境整備

●集落住民に計画を説明し、合意形成しつつ実施

→　住民が納得し、主体的に生活設計（町外、首都圏も選択肢）

●拠点集落でなく、一気に中心部まで集団移転

→　総合的な生活機能、多様な職場を確保（夏山冬里も用意）

●新しい住宅団地を整備し、一般住民も入居

→　集落出身者がミクスト・コミュニティの中核に（祭りの継承など）

「ひとりひとりの人間とかかわる計画。
色を塗っているときは、人間の生活（なりわい）は
見えてこない。事業・拘束計画になってゆくと、
人間の生活を変えてゆく・・・」
（1978年の受講ノートより）

小国町のまちづくり

「小国町生活圏構想」にもとづく一貫した取り組み

●山間部の豪雪地帯という条件不利地域

→ 限界集落、縮退を直視した先見性

●高水準の小中学校・医療福祉施設等を統合整備

→ 住民の暮らし、生活水準を守る強い意志

●幸町団地：中心部にあり、総合的な生活環境を確保

→ 年月を経た現在も生活の場として持続

●叶水集落：店舗・農協・保育園閉鎖という現状

→ 中心部以外の拠点集落は維持困難に

再び「圏域構成の再編＋生活手段の確保」を考える必要

計画地区の現在から読み取れること・・・

計画の科学　×　生活者の視点

・商店街・マーケットを残す
・駅と街を近く、大型店は離す
・歩行者ネットワーク　　吉祥寺

・居住地を1カ所に集約
・都市的生活空間を創出
・通勤農業　　八郎潟

・道路・駅前広場の見直し
・既存の街の形を継承
・住民協同まちづくり　　立川

・集落を中心地へ全面移転
・夏山冬里の生活提案
・コミュニティの継続　　小国

革新性　＋　合理性

計画地区の現在から読み取れること・・・

時代に先駆けた空間 → 現在の課題にも応える

オーバーレイする街	→	老若男女・多世代で賑わう	吉祥寺
住民納得案を作成	→	界隈性のある街を継承	立川
総合中心地の提案	→	未来に希望のある農村	八郎潟
縮退を直視した計画	→	新たな機能集約の段階へ	小国

先見性 ＋ 普遍性

計画地区を
歩き終えて…

私たちは石田先生が計画された4つの地区を、
先生が残されたノート、メモ、スケッチを頼りに歩き、
従来の基準や計画標準にとらわれずに、
今ある空間の働き具合、今ある複数のレイヤーを
石田先生の精度で綿密に組み込んでいることを再認識した。

実現すべき空間（都市像）は、
計画の科学と、そこで生きる人達の目線を同等に持つことで、
机上からではなく、都市計画の実践から生まれるのである。